

215
2057
32



志
同

七

重慶府志

志だ

卷之二

辛酉歲次

歲次

もとく小義平は、七年まで開えを天賜の年小
うる天曆す。辛未の年の印跡す。所にかくよ、
おるあるひめましま、小山の左扇ふらうせ
る、をやまの太郎ゆきあげハのそむくをれ
かうようへよろじび、あまきりあうトとてびへ
もとくり、川きり、ひと内大臣、仁儀の御ご
りひ草のうけうつま、まとのくお角くわさ
まんとうももをきうやうすくアさんとて
えむのせうしやう城をんだもーえ

せんといひに又ふとまきを讀み書てぬりひり
てそぞふらひきうあざりゆすみが
どろほくえもくめまでをやまれ太郎
ゆきあげるあくねととおりしてあまは
るまけのまちんそありおやの事と思ふ
ものだふとよふはまたうら幸やうや
てあさんをせぬあうことをやうふかくとふ
うふ幸やうくのりきめくはうみうき
くくくくへ来まくまくまくのかくみ
ともなんぢやとこそおわせきり



も時もとあらぬ事へぬたまどりて後きうひ
さうぬとくま朝の時れ角あさめやよしれ
きもあきりとせりきふがとひめふ一ふを内
ゆだりあに人をそきとそくともひこせ
おとりんとうりそゑあとのあう残のぞむ分け
かふよとすらきのうなあこうゆくもま
うわざよのらうとく残百殊二百強まきの
まんまと一人ありともをやまへゆくとれ
せんふかへきものそ終もらひきくへ
うきへぬちも一階西事一階中さぬぬくも
アキリハ右あひあ一階下うちひといて、
ゆ不せをうるるまそれ引ひとりの君まきらふひめ
み、ほわふ他た人とうひときいちやうらふ
やうれうゆりくのひまてきのう
たうへはくさせ候ふとも承うけよをあくい
一ふもゆがらせ候ふべくじんゆはとんく
こまうとてうかんうらふすくめもあた
きなりえうどうなりふ「こそくうぐれ
活ふな」とあらくよゑの世をえめくた

まさらせ終ふ駕けまし山あふほひりんも
ひ車くの活事へるアトと外よアキリ
凡ざうちのよ・や若の活事うふくも
まひのあうまうまふとまくきうちれ
者えへうああめてゆききものと思りゆく
くはやうのやどのはくうきよきらくうき
よふううわふりくとりうてせんそくうき
よのふいとぬとひうらうき山のうき
かゆとりこらもわきんぐうらうき
見落ひきり あいどものまくれられて
ぶ乃くまきはな理のをさうふともなむ
さき一人ゆすれぬ上のゆきアガキテハ
せんうと信たつたが教訓がまけもくへに
まいせらうくうへ人あきうもにゆふろ
こびとくへとくらせ終ふもま
うあよろめよのとくみなひとりりえ
まうめび方 本和りりなりきれ あら
乃や一きハらやうもくへ十二ちやうそく
してきどひ三百疋下まきゆく
あくまごの宿を内られけり

おととほくらやくて宴か便びひすまうらあ

ちやうとうの先祖の郎ホトモ目く小お仕へ
ひよもすされをうきぬ又み六人ハ功り
くそりの仕事でうみぐれはおよけめ
さまたみざいのゆきをうすく成れもふ付く
首よりものうき事たね下くしてううてこ
きうの方をうよのああ残らうよけれ
世あやううりをまなうぐへこもんねゆ人よ
しやりうまとと身ひそりあごの阿内小ゆき
ありりんきよしてこそぬまうけき は臺



ゆうまひやそをのうまいまをまへ城郎ふよ
のこれそのはせゆはとぬまれりのう小山を
一人まふもゆくまきもほのみゆめきをさと
よろじひとうてうへんがふうりなづく深く
鷺あまいりんきよあねあどきゆきいのうち
すり大事のちきしゆく一家うけくまう
てうかりとうらよとまとへせんかとそ一
りものとさんをまくらをやすの太郎よ
あけらうくまうあひとをやまんう見所小
まきこめりくまくまよあきくどざふく
よりもまくらくへうせうそうもんを一川を
のそらにあふありまふくちこ玉はくり
とうてうへ八万町乃木也ゆうめひあくや
は内引く一万町をきく船引けうとだふ
うふぬともうまとそんずうぎてや強る
七万ぢあひうち下總あ岡のねうりのすけと
うつあはまきふまくうゆことりの岡よ
二人ともあうをまく車くべくうそんそ
繋る あるまくたまくうやうせまううく
あがく事天乃あくとそんすまたあ

けとくあらもほのよみ馬らひと成事ノを
至シへしゝらまうりしふりんと思ふうそまハ
強キりまきけりあよせんに内よそうねと
ありしふすとゆをほきうちばさきへんと立
みよふぞうとあどとのよひうち下總西國
ふあはきかきよべくにうれきくふたもくわ
里へとく海野路へとんちを國小ゆノてて
我ガくうみよいはりまくらひとくひ
芦シロみよいはりまくらひとくひ
ゆあ乃あくちちくうとくふまきゆノを
を筆よどめうノあみやだてんぬともあしがへ
うりうらやいきうまうてかくりよごと
くをじかげき終へせうけうま、ほくひみて
あまけとすくゆくゆく、深確シヨウがまがま
をまくあくまきだまひあくまきだまうつ
ゆうがまみだふもりまきとりくこゆうき
かげよあくひまうらよぬらん事ノをうかり
がくゆくそとまるをすくくりうきノ今

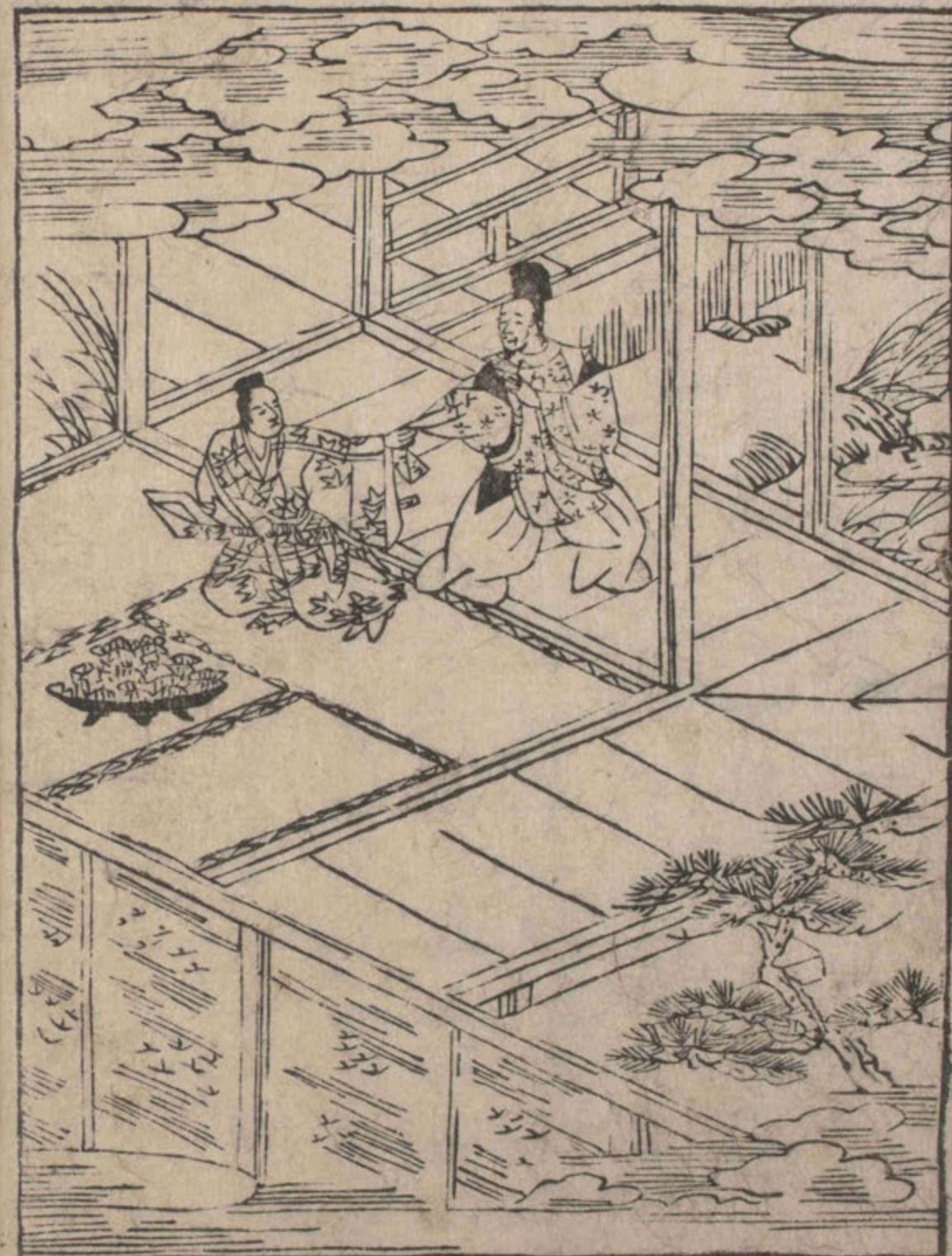
乃なまくわよひの國ふやもあつりとうき
の里とりよどろよへるねをまへりてな
まそまそへせちゆき枝くどくがわらんえ江
きくうなふみほけてたゞりあつりよへ
りびきへ引をきそおきつゝきとすけきど
をせとく風らぬあぐらなよやどりてく
れもーきれ めづしきわ事うきと
れり まくい人の節ふ也 まうませんぞのみ人
さうし歎きはくをうめむをうゑ比隊次節
たううのたまつあの人とと見としとひ上
十一人ほわととあつひやりこめされとよ
まうりまくはれんはまうあく事 いうまう
き

さてくかゆとすげきそと内儀りやうぢやう
とりへへたりよのなうよとくもまわしの
考傷すゑんりごくアヨミシテがせんざおきつ
一またゆふ直君らうとうのけいぬくとや君
えもまきえ三代也せう色への合戰すまわ
て板交つゝひひきともほあふやく
かくうりふ小きともみやくよ出走ありれふ
もよき者るまだをやすよとひりやうされ
無二のやがれやうあくをひりア
ひれんまよりくそそくしてこらふをさ詠



大せしとよきをあきいでうらぎもよりと
おはよあくはまめあゆとより我おあん
あいしやもまとうちがひちのびへ三すす
を吹破け一方よりえゆくりりふみ万殊、
さく、勝とも思ふくさきに只一人をやすとえ
まんを事をきほの子ぬのゑむとちやむ
よとくやうみそくみきうそ中アドリ
もどりこのを扇がヤヤうあきとようらぬ
せんざうき理哉もうなづのありせんきい
四ひもとくわ事アヒシテはさいそんじよみ
さくわくさーりんきニりんきニミン
モヒタクはくまけをもくうちさくとま
モ理哉そふうんとく見てスカナテウハモ
カモうまーてや一々こせきうねさくご成てき
モうまくわそのさじかひくう小アヌ成ト
モアリうとくわのあがなりあまひあきあま
えぬ一まますばくとせうもんあるこよきと
わゆくさくきあよきん成立とくはるく
人さくうんと理哉とまくわくりひきました

あこころんとをいとのけちざれてうづくと
あきうとひとへアのこまく御主をレナ
かまつてあはうちあミハ往スルりまよシテ
アまのしやゆんと天長地久活スルまんぢん
まんくさいえんめいとひのうすり外シテ
ひあれいとすばらう人ヒトてうふくすく
夏ハきうらくあうのちきんそねそろもうい
さうるきりくわうシテへねりせぬけられ
せんとまくゆげひとヒトをやまめのううう
もうきぬううううシテばんとまくたりと城
とくくひりとくめうてはなゑんハナエの敵アキがと
あひんや一朝ヒタチのぬらんハナの大幸タカニ城ありれ
まよせくせくハナのまくまくはまく
事ハそ ちく及シテも活スルまくえスルとををす
キハきまくとそ そぞふはひとくらりきまく
せんもうけまハナめハナもくらり変シテけまくそ
あたりきくみハナの事ハナてあつほひハナ
お目えらふハナもあハナ一而ハナよあそん
うそくやまハナとあんち志ハナだりきりてうゆくれ
うんのび身ハナおそろくそ忍ハナうき

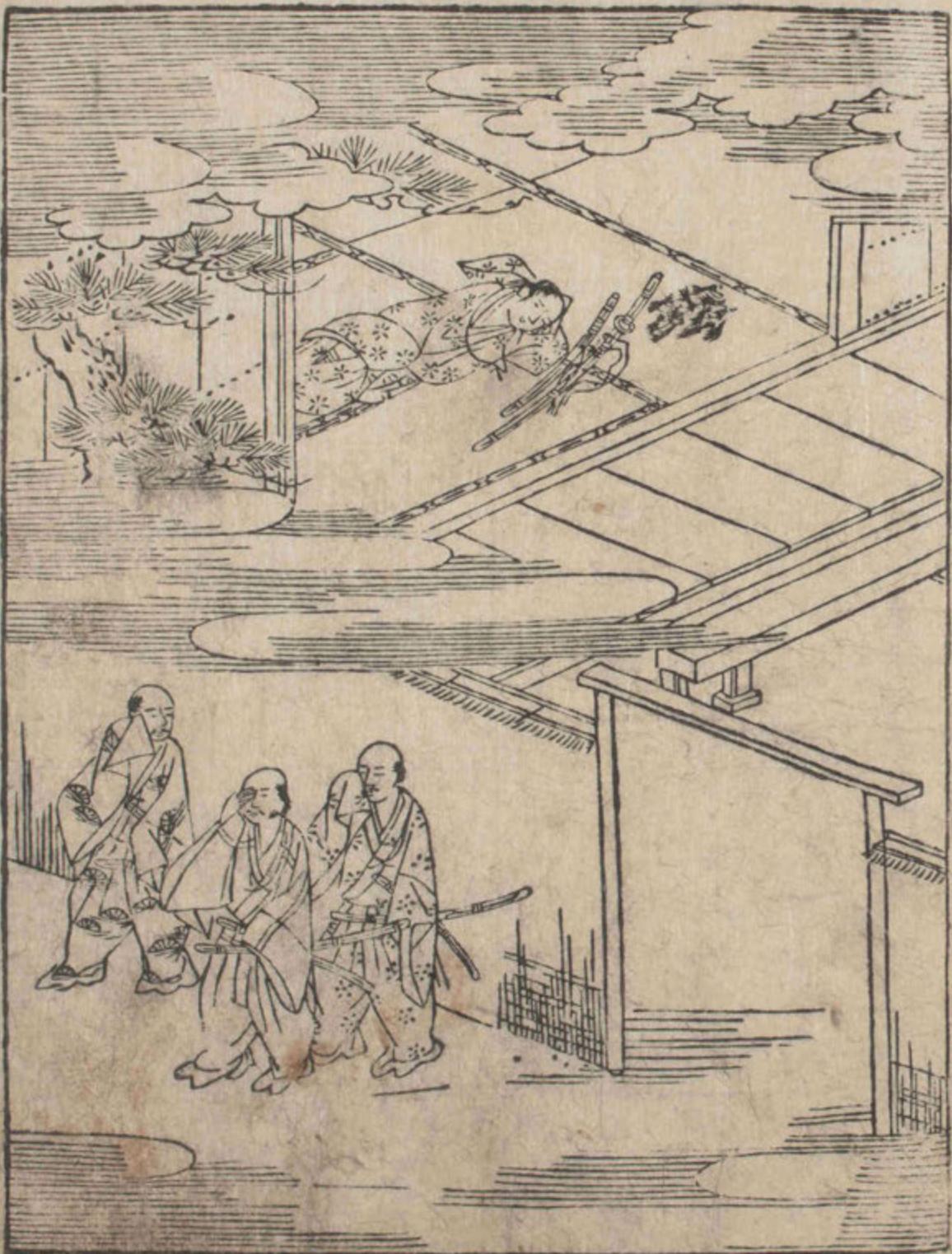


定面のぶんとくをかうむようふがけの元
ゆうきくよ山う川木ノや正月のあみ昇り
内ちくくゆいひじらのりひをあくせうわう
はううし乃や称けすんよあせりのもまと
おりあくよちくぢやのあとさまもくふくう
あく背りそきのあく立小きりわんぢんぐ
日こりからく初一日のりんぢんぢう
うちたあひに二月を觀るかく三月まきいし
お向に月へあくとあひきく自へごくりがく
さんせ六月もとすふうんうつ坐しや第七月

かあうの日へちうそん不動あうこすせあふ
せあくそいのりけつと重ともな理見る所
よ角くそひのあるゝ一刃もさまたあうしや西國
すきひくニ七日そめりあまうを主をすく
忍くこまだせんあろしくせんたりふやうん
ゆうるしやまむとせあうそくはく殊敵れを
つまきせねをあくとねひきとくとく
えんこ城を内くじ跡とくとくのことをおて
くうをうちくとくとくはくがりちやうまう
うりをあくせんちとくぬとうのをきしう
きめつてもハドアシケンヒオレ血成と
くきん神んと天地とくとくせめけま
あまうりうはくせめられみどりそんを
ちんぢうしてぐうさんせはくことうり
うんかうふくやきりとくとくふ大いとく
のりうしうけのとくとくとくとくふえふきらう
そもふきうれきんのうきふうまうはいて
忍くあは一かうを威れあくとくとくと
あくとくせねひきりあくとくとくとくと
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

れとのやらせ給ひまくやどみをうちりれ國よ
やくうらうらうあらゆくにけうせぬふき
ともすうふくかきうりあらよし内くちごと
みはむひのめりて かは臺タケふあひがふ事
なりくりきよきとものぐらでうみわ
ねうやまうづきものぐらをぬ ジ教やう
くう國カミくにの國よやこうごんごの
省ふげうせ跡マサニ 沢牙日くよおうわへ今ち
あうふをうみもひきにみ日ヒうあくま
う 俗ハナ國カミ夷ヤクニめまうり十一人ヒトに人ヒトこ
やくやれようちうるてりくへせんとまげ
よまほゆふきうみわね生シモ死モモの方カタ あくの
夷ヤクニくそく族ツクニのもきと云カタわすりありもき
よのけあげきくと人ヒト伏フく小コトためタメ
よきととじまうきのうきカタときカタどから
わくきへまれうるもカタ 枝ハラうづきカタと
さまはむえんのひとととくまうきカタうりと
きすそあまきうカタ一人ヒトの人にヒト一イチこ
ふやうやうあくとくの邊マツとさうきあくま
すりとねやくうりの邊マツとさうきあくま

よのうちとあんせん又の人のとくのまん
 そそり矢乃をすたるるむけきもとやうひれ
 ちあきこと一世城のうまんと思ふてあひび
 くふりひきりゆどろみ多へが信田あれ
 まくらうとふたりとまといくぬじひとを
 なげきど。そこそきあくらせおふゑまちのひ
 稔あひてあくせく。されがあ移しのゆう、ミ
 ユモー君ゆくゆくませもあくられず
 さんかまうりなすときを思ひもううれ
 くばかりよき



てんぬきれのまふ多情月とす風を絶ひてあけ
きてえもよへまことやうしきくと絶けまち
唐邊事トヤモノのとあへあはいふと思ひりつ
だとゆきさをよみひてあらりとゆらんゆり
をまげあへうふたうや十一人の人これより
さざりそのうりきり きごどめあひす
麗えりてあへるのけなのあまきやくとも
うま世せせりとりくとちわくふはまゆうて
辛ふとくねあく一人と何とまきと思ひて
すそくあいびくへひきうどくとれきげま
経へとものあすくもゆくまも うと
まくらんとくはよどもへ畜のてひあやまち
事乃みぬとううがひやよそくめをりりせ
くせばくらくらうりゆふていふやもゆくさ
やど内理残きらなぶくもどやもやこへね
のがりわくて ぬさとひきだくせども
とも人むどりをあへてもううきよふとみて
せんをうすくまくまくうちのうる
く成行るとくにまくとておんあつやかま
をわきもくふまひとをくわふとひあやせり

わいりきりさかはゆるがりもひとりあふ
とどまうらへどよみやこまでのほともとげ
このゆくこゝアベー今城まゝみちうめさ
やうらひすりふとくへたりほくもんれ
そとそばりきとぞ見とて絶えをさちてん
ゆ乃きまくあつづきとそくめアラリキズミ
宿がびいきとまうきりあくまだてひしの
とまくとおへきてそのうちきるふ衆よ難ぐ
まゆひゆくぬくぬりりてまんまとゆくふ
くびりきりちよとおとく一人おふとまう
と處へとむ 翔ぬけのものうへなまう
ううきてうねあせり うとまくぬく
まくくよ やる ひくをうきくとくと
まやこよ月をはきれとぞうとまくひ称を
まくゆきとむあらのえんとほくへ稱するも
まくまくをうありに 一たうりとまく
まくまく ちよせんうみわ事とある
すうきああぐらのぶおりまきひくひたみへ
くびりあゆごとれてなんすうよせいかんれ

塔ひんをまばうがひつてかみやん事
さふらみぬのめくをもとむりまききら
ほひごめしかもわちこへもよしそうど
里きらもやかぎりあくとおほそんばあち
すくまきどもときせよまくづまうひとて
をやまう門のるんよへすむじあんまいと
せりせきまほうちうむだそとあゆうりや
くううえすまくうてはあ事ひうのい
えまくうさんなりと経けまきを奪ま
あがくほくまむゆうとうあうをきれ
くまへとりくねやけきともあればうち
とくろトヤトウア後疎被ううざつてひく
やくまうさんあよまうりゆへるめめ
ひうちうみうけてねりくうりぬくへて
うちたけきともやうゆんのはうき代えすけ
行跡もくかにギーしくてヨシキ
めよと そくくううううそくく
くるうちへりまぐらへりまび神んそまうり
きらわうりや信圓あくうへうく
めくうまでみくら被ひまくへん

乃世トリトモおもひ色ミシム。お舟トメ
そりかまのり多ひ草木のする所。舟とあらね
じそくとやうじとるまき。舟がひそむらもの
まんまとへひく。まよせと風つゝ。うき世
よのこし。終よ事。まことどぞあびき。終へた
をうきいなまたとくらふる。まよせとあら事
えきうきくとあくうう物のをとまりふ
まんすくほりなり。まうくとくうう物の
はめにすそをたどとそうちあすきほさせわ
きあむかのまことなり。



みそり城下向ありまつ

そぞろみちらほらまくらむじぐる等のあそび
あらかじめひつめうとうがあやまこあ
まわらわふきうらんとゆゑもまたもい
わきてとくまくさうまくあたま成り
やねくへあくまくすますのまに幸あまは
よろひと引あをせうらざいもひとてぐ
て河内ふゆりふ人のみせとちうけやあを
くわざくせうらぢらぶあひらひよくひ
まううふあよそんのめくまわふよくひ
不^ト画^トアまわらわふあうき一^トサんのうあれ
くあくよぬがくアあくふがこく一^トナ
ひととくとば事^トもあて枝^トあきづくみ
山里^ト下^トへひく^トうりを終^トあくとくりふ
うれ^トがせひくたなやすくあむ^トとねがく
まるんぢらよひくさばさせ時^トもとめさき
ひくとく^ト伏^トとくのんもうよきとめくとくやと
へりまくよみぐれへなふ事^トとくかく
乃活^トひ立^トとくとくとくとくとくとく
よろひびくとくとくとくとくとくとくとく

かあしてくさふりせん。かふくくもゆくも
ゆくもとと人まとそろてやりまくせよ
くもととほきりゆくとくにほよ
くもととほきりゆくをよ。るととくらせひ
えとわげうらしけぬふきとけぢすまた
みたえあふもあよてととととくもひき
のき張きゆへおさんうきく風くうろこび
りそもそよのりそきけじとすきどちの
事小山がかりへきくけまをやまね下
まふね、くわきとおせんの節ふううま
しぬが、おれきりやかくむきあひにのつ
てんじとの大変うる、アリまよちうれき
まきよもよせよとや。歌うとやてをやまが
あつーよ、すらぶねゆく一の戸とせめ
りりききとも大勢うるせりう人もして
つありとと小山が食おまえ即ゆき三す
金糸とそらーーあくびせんどうだうひきれ
ととあきも大せいうをせてひつゑすきて
自えひりうでいかうよるうととをやまよの
ひじりきまきひうち下緒あ圓にのく

ほどのへんをうかがひもあくせんとく
たうひきれたりまやよせみい國がひと川ふ
國く若ととしゆともむらへちふねとほくらを
あくまとへつへせあきまほさのひりく
くらふへま、そやニ三の本戸とも打角ぶられ
けめの城ゆどありりけり又のたまむぐ
のうへとむだああげくひきりきりのりば
ゑもよ合戦へ度ふよろどよふやうんとま
不りりうすゑとよむひとうとそりうと
おーくにとりつきの内までりきてあらきよ
世ふかゆとゆかくとみとへうむううう
ゑ小残せよち夏もあら草すく後まんと云
まく小まひのゆくゆくゆくゆくゆくゆく
あまくもを矢射三ううかくせよまでゑ
ぐくよもをあくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
へきてえぬ引くへりくさとてせせんと
えうと死神うまうます年み十六才すがうう
かくとくよあげうすまねうぐまくく
ふあらるふとてふともうゆくさとこくま
て今までとひそとあまうりふうとほけ

られてもやうまへぬをあけあつとの日秋
さんごと與へるきうとめふうむくまう
とたこすれへんううのあてひやくさんみ
うきのすゑあてくまのかものもとまひあら
ゆうてへりよのまへわくちだりよさん
あうどりえくふがさんのもいそー。よと
ひねくのようひのうめときとかく座くと
まとかくと角く立ちてくますらす
ぶらくとゑゆつて上等ちあうとああれすみ分
のよしゆとゆくとくのまきすとまひうち
きり一尺八寸八寸九尺一寸やくどくほくち
まよ三尺八寸九尺一寸やくどくほくち
やくちもひて四十二きひゆくと十丈まよ三尺
と三寸九寸八寸九寸九尺一寸やくどくほくち
やくとふくとくと角くねりとけりけれふま
のからぢあとけりねりとあゆみせは人
もりせあゆみせはりけりけりをま中ゆきり
よこくこのをうちのきやうけせきハま
あけ六尺八寸九尺一寸九分のくさきを
ゆんはえよすりゆくまのりゆせもく

よとまとをゆう先輩ふ人のものたゞおひの
くのをそく残候あらぐのひまゝりのり
なびよすれどとらぢくうけうすりあと
あらり一ばくしたみくがもとそそわる
もきひやのりきりひかまとかあねんじそ
きりけき ちのあまくられうへそ
ほくそそほきくねうもはうんせよ
いきをきりやういをとうぬよすふ あ
くすもとよふうせふくせゆ えきま
すて只今あらさんむさよる。もあらね
どまつはりひう今改めまりれ夏がまた
今一なづまへう不乃せよ きをはるハ
おひぞとさもようう床たまもそくく
とぞきわるう 猶うもうがあきせざう
くとうらまへおひすりきたらまゑ
りまたいまのまき事うれはれてえきま
きなやいふやふとめりくいへされつた
まのまのあらがせううらまくまへ
あしてうよりくみくふせじよふうくく

まよひもくとくとくあけやまよほり
もうけあい風のいろことまがへりくとく
くとり色へじうの羽びとるうあくう
く風のまうみあくうしてくまうじくうに
まくきぬそひふうれとまうときへけあり
のひら枝ちやうと角、かりてやられだれか
とすひおぐくまうゆ切をとよぢとへくう
くまきをだよのうれまうとひきうう
のむちをうれてまきうてへうううれだ。
うちのけうをしてさううれむち枝うて
まきややちをひまきあまきうてまうぞう
のあのもきりくとそ。あくとうくかよみを
とせゆくき支をあけきどもみをふらうと
たまんがためうのりとばうらうくさう
くとくひうりいとくわきたみどもがく
もがくもいさあられおとふとわげくもり
りがるゆかうりへわひきならまうき
ほくへしきうれのね事をくへくれ
ひらのまくくひくうよひよひとのりはまみ
てくまうとひくまきをゆくのうりはまみ
てくまうとひくまきをゆくのうりはまみ

ふととまこ



うちも奴下を人たりきり。うりとて
そらとだしけふたをとす。たりぬくまう
あきだまそよどもがりくのねそくろきよ
うけはめ」ととせんとそくへり。まわ
とまれとせんとそくへりやふりそだる
うちれお井のとうまのまくふひきよろひ
アキ称めて。一ときえきよかひよろひ
なげうくとめとかくよすへたまごのみ
一ほげうもとくとくとくとく防とてうちわ
けよみのふととくとくとくとくとくとくとく

だいきもありくかおもやうりうすや小山
乃人こ我とほゝゑと圓ふらんをうきいわし
より三代ほのらひくまうみみ代也まくまく
ううに大の軍のきんぢぐむすあふくと
くや女とたまびらうありとほの月くよ十六
二川とおき今きひちとの活まううすまうそ
我とおとりんんくうけよまなきをえせんと
がくととおとくうち萬能くもぞふうけむと
まくらきり ちのたまくじうへんと
ほくくとてすとまくわうううへな理めう
まうがかうなまけわり、どうくみのせが親子
先輩あうぬと聞くとあひきうくそゆうぎ
るきりふやはまきうくそへ活かきてまんま
いきとせられへためすくまに
事ごととてあごとねとせぐへあやうじ
くくくとくまく まきうどのはあうこよん
えんがふく内ゆくくてハケぬはまうと聞く
八ヶ年と活たすりそーがきくみゆんま
のゆまかこふ人えがニ川ゆくませとまうの
までとうねくせんとまうの坂東ハケ岡北

ゆくとほうもせゆよへーたゞひそれくは
免とけろとも君へりのちとぬよふてせみ
まくいはすらりへくからん二十又みて五代
ノトヲセゆふる まきもそまくわむを
りきてふともぐ余をゆけまどあ度アラタハだもぐ
残かくトあめかうらぶ小残アラハくまのる
奴やぢもひもうちあふせとひきへくに
小けくまをやすがうちふと残アラハてくに
ああびは代と持持へ いとぬやてくに
ととてくにとゆゆきととしてゆりひくま
ととくへゆつとり一粒イシをのせやあくめ
そそぎもしてゆくとこそとくらりゆり
ゆけえびくくまゆびうきかくま三ミキよ
「そそぎへうけきゆの日そひごれうらきの
よと紙シちくうりへうきだまきのほへハすを
きうちえとだ三ミスにあらんひとえよ
かのとくへけたり今ちうとひえ長ロハにて
まわうすやまとらんとニーゆくけくま
さうゆけあらはと福トモちくうなげとくらふ
まりひくからてこそあつもきう称シメくらふ

うをほめてまじさんかうあちきめやりと
ひきめがきくれあみうきものとゆきへせん
さよねうとうとせり あうぬとゆふこま
さきゆとひくつてうたのけへきて入
れどとあもそくものいき。まうとほくふ
兵はふちもきりほきくひうちとのゑ
やくうく風ひまんまくりまほま
長刀はふ兵はよまのあくまうりまほま
まち車ややるやくま縁うくま。うちと縁き
もあまゆりゆりへやうきにみたうきと
らくとくあくまうりうけうきりまのうよく
くたよまなうんちくまうのたうひ小ぬ
ひやううまたよくまなまうとまうくま
うけあもまう金銀けいふうう時たみえうを
落ひきりはくうひの兵は波あやきのあん
みにくまうをあきゆはうでゆかるゆまうき
しぬをまうがきだまくとくらるく三川ふうち
ゆきいたまとむろけうけあもせゆぢ敵け
わきんげふてうううりまうよむらさひうり
まよまよとたぬれた三年三月比合發也

はううひへ朝日七日うちあくまのひうす
あくまふたもあんとよせともあくやうと
うをうるうだりむうりものからにえうれ
うらをまうねほうとうり。みのこふせんを
作てん。ああわうとうとうくべきあううちをせ
さうれきのゆ。ひきむじをとやてたゞひ
よかうまとわきとくうううううううううう
きまぬきのひなうりきり。ちくとのあの
トトけらんじてうきしぬが云云きさう事
うきともうぬ詩元もくうんぬよりのうと
たもふるきとほうのものとねくまくらく後
跡きくさんとく跡くとくろへ小山が郎があり
まくまく君乃後をひやいとまくへにわく人
とてつけとくりうてある



卷五

二二

